



ほーほーどり

我孫子野鳥を守る会

No. 120

1994年

9～10月号

☑ 行 事 報 告

手賀沼探鳥会とカウント

期 日 9月11日(日) 雨天中止
 集 合 我孫子市役所 午前9時
 案 内 秋の渡りが始まり、気の早いカモはもう来ているかも。暑さも一段落して探鳥にはよい季節です。
 正午頃解散
 担 当 西城、木村、小池、畑
 午後は「水の館」にて講演会があります。ふるって参加下さい。くわしくはP2で!

シギ・チドリのカウント

期 日 9月15日(木、祝日) 雨天中止
 集 合 我孫子市役所 午前9時
 案 内 車に分乗して水田地帯で調査します。秋のシギ・チは当り外れがありますが、出会えたときの喜びは、ひとしおです。筆記具携行。
 正午頃市役所で解散。
 担 当 小野、西巻、畑

タカの渡り調査

期 日 9月25日(日)
 午前8時～12時まで
 昨年、安本さんが茨城県側で調査をされました。今年は当会でも千葉県側で調査する事になりました。協力出来る方は、ご連絡お願い致します。初心者はベテランと組みますの

でどなたでも参加出来ます。調査場所は我孫子市内手賀沼周辺で数ヶ所です。

連絡は 木村 0471-82-7958
詳細は追って連絡します。

担 当 木村、首藤

伊良湖岬探鳥会

期 日 9月30日(金)～10月2日(日)
 集 合 30日21時 我孫子中央公民館
 (手賀沼公園の東隣)
 交 通 観光バス利用
 費 用 約23,000円
 (宿泊、バス、高速料、保険等)
 宿 泊 伊良湖「五月堂」
 0531-35-1048
 持ち物 1日の朝食、雨具、1・2日の昼食代
 案 内 昔見た、数千の鷹柱(サシバ)をもう一度見たいということで企画しました。天候・風により数が違ってきますので皆様の鳥運に期待します。他の渡り鳥も期待できます。
 申込み 染谷 0471-82-3972
 電話は夜にお願いします。
 先着25名
 担 当 西城、染谷

沼南町中央公民館の探鳥会

期 日 10月8日(土) 午前10～12時
 場 所 親水広場水の館前 雨天決行
 案 内 公民館が小学校4・5年生を対象に行なっている自然観察講座の一環で約20名と若干の大人に、遊歩道で

探鳥指導をします。雨天のときは水の館内部から観察します。

申込み お手伝いくださる方は、下記まで電話をください。当日望遠鏡を持参。

西巻 0471-84-7809

担当 西巻

手賀沼探鳥会とカウント

期日 10月9日(日) 雨天中止
集合 我孫子市役所 午前9時
案内 例年通りカモの第1陣が渡って来ているかも。

正午頃解散

担当 木村、畑、小池

手賀沼・沼南側ミニクリーン作戦

期日 10月9日(日) 雨天中止
集合 我孫子市役所 午後1時30分
案内 探鳥ポイント2~3ヶ所で周辺のゴミ集めを行います。

担当 小池、幹事有志
4時頃解散

古利根沼の清掃

期日 10月22日(土) 雨天29日
集合 JR湖北駅改札口、午前8時30分
同駅着、上り8時33分
下り8時26分
を利用してください。沼まで約1.5Kmを歩きます。

案内 市役所主催で関係団体が協力し、岸のゴミを拾います。野鳥をテグスから守るためにも、ふるって参加してください。ゴム長、軍手が必要です。
午前9時から11時半終了

担当 西巻、小池

◆お知らせとお願い

講演会のお知らせ

演題 「どうしたら手賀沼はよみがえるか、その展望は…」

講師 西村 肇先生(東京大学名誉教授)

日時 平成6年9月11日 13:30~15:30

場所 手賀沼親水広場 水の館

入場料 無料

主催 湖北座会

共催 ふれあい手賀沼の会、水と土・手賀沼の会

協力団体 当会その他

講演要旨 最近の研究成果から手賀沼の水質浄化が技術的に可能であること、その実現のためには何が必要か、これからの都市づくりについて、などを豊富な経験を踏まえて、わかりやすく。

手賀沼探鳥会終了後です、ふるって参加を。

野鳥写真展の案内

手賀沼で観察された野鳥を写真で見てもよ々と写真展を企画しています。野鳥の写真が撮られている方で写真をご提供いただける方はご連絡をください。

開催予定 11月

写真の範囲 過去に手賀沼で観察された野鳥
サイズ 4切・4切ワイド

費用 基本的に会負担(一部自己負担)

連絡先 西城 0471-75-7148

長寿大学野外講座応援のお願い

我孫子市公民館が主催する、長寿大学の学生50名による野外講座が、つぎのとおり行われることになり、当会に現地案内の依頼がありましたので、当日お手すきの方は応援し

て下さるようお願いします。

実施日 11月22日(火)

集合場所・時刻

あやめ池船着き場 10時30分

コース・時刻

あやめ池船着き場～鳥の博物館

11時～12時

持参するもの

双眼鏡・望遠鏡・図鑑

連絡先 ☎ 0471-88-8494

赤尾 完

◎ 行事報告

○ 裏磐梯の夏鳥

(6月4日～5日) 染谷 廸夫

集合時間の15分前に、集合場所の我孫子中央公民館に行ったら、参加者全員が、集まっています、いつでも出発できる状況でした。それだけ今度の探鳥会を参加の皆さんが、期待しておられるのだなと感じ、これは楽しい探鳥会になるなと思いました。予定時刻前に出発し常磐道を通り、国道49号、磐越自動車道を経て、猪苗代湖畔で昼食を取り五色沼に着いたのが午後2時半頃、我孫子を出発して約6時間、やっと裏磐梯の夏鳥に逢えるのです。直ぐに五色沼の探鳥が始まりました。6月初旬、松林が有り、午後の時刻と云う事で春ゼミの大合唱に迎えられました。春ゼミは我孫子ではこの頃なかなか聞かれないので、懐しい気持と自然があるなと思いましたが、今回は夏鳥に逢うのが目的です。鳥の姿を、囀りを見たいし聞きたいのです。少々うっとうしいな、と思いました。しかし春ゼミの合唱のあい間からキビタキ、ウグイス、遠くでカッコウの声が聞こえ、近くでメジロ、コガラ、シジュウカラ等の姿が見えました。けれど春ゼミの大合唱にはかないません。五色沼

を後にして中瀬沼に向かいました。中瀬沼は春ゼミの大合唱が嘘のようになくなり、鳥の声をハッキリ聞くことができました。アオジ、ウグイス、カッコウ、ホトトギス、夏鳥の声が遊歩道をつつみ、何とも云えない満ち足りた気持になりました。春ゼミの大合唱の後だけに、より強く感じたのでしょうか。

今夜の宿は裏磐梯国民休暇村です。裏磐梯が一望に見渡せ大噴火で頂上が吹き飛んだ荒々しい山容を正面に見ることができ素晴らしい眺めです。一風呂浴びて待わびていた夕食です。外の泊客との大勢いでの食事、まるで大宴会場のようです。宿の心づくしの料理を堪能しました。

夕食の後は飯泉幹事の部屋で酒を飲みながらの鳥談議です。泊掛けの探鳥会の楽しみは昼の探鳥はもちろんの事、夜、集まって皆さんからいろいろな話をお聞きするのも大きな楽しみの一つです。鳥の話、皆さんの経験話、自然の話、お酒の話、たくさん話で時のたつのも忘れてしまいます。

ところで夜でも鳥の声は聞くことができます。夜の探鳥を、と云う事で8時過ぎに宿の前の遊歩道へ出かけました。ヨタカやトラツグミ、ホトトギスの声を聞くことができるかも知れません。真暗の中を星照りがたよりの探鳥です。大勢いでの探鳥ですから心配ありません。これが二、三人の小人数でしたら、大自然の何とも云えない夜の雰囲気少し緊張したかも知れません。しかし何とも云えないここちです。子供の頃の夜の冒険みたいな気持になりました。結局夜の鳥の声は聞かれませんでした。明日早朝の探鳥に期待しましょう。

翌朝、朝5時宿の前に集合、中瀬沼遊歩道の探鳥です。早朝の爽やかな空気、素晴らしい緑の森、飯泉幹事外ベテランの方々のタイミングの良い解説、中瀬沼の展望台での一望に見渡せる景色、遠くに近くに聞こえる夏鳥の囀り、クロツグミ、オオルリ、キビタキ、アカハラ、ウグイス、カッコウ、ホトトギス、

アオジ、夏鳥の大合唱です。期待通りの探鳥の醍醐味です。これが「朝めし前の探鳥会」です。何と素晴らしいではありませんか！朝食後、いつも感じる早起き後のけだるい感じ、何とも言えない満ち足りた気持で宿を後にしました。次の行先は会津若松市にある会津藩歴代藩主が眠る松平家廟所です。この御廟は全山がうっそうとした森林に覆われていていかにも野鳥が好みそうな場所に思えます。歴代会津藩主の墓を見ながらの探鳥です。ヤブサメ、ウグイス、キセキレイ、ミソサザイ等が鳴いていました。この後、昼食を取り一路帰路につきました。皆さんは2日間の探鳥でのこちよいつかれに満足しているように見えました。

今回の探鳥会は梅雨入前のおだやかな天気にも恵まれた探鳥会でした。夏の探鳥、それも山の鳥を探鳥する場合は、森林の木々や葉のしげみに囲まれて、鳥の姿はなかなか見られないものです。美しい声や囀りを聞いて満足しなければならないことが多いものです。それだけに木々の間や葉の隙間から鳥の姿を見ることができると一層楽しく思い出に残ると思います。

私は今度の探鳥会では、オオルリ、キビタキ、クロツグミ等の姿は見る事はできませんでしたが、美しい囀りを聞くことができ十分に満足のできた探鳥会でした。

<認めた鳥>

カイツブリ、ゴイサギ、アマサギ（常磐道車中）、コサギ、アオサギ、マガモ、カルガモ、トビ、サンバ（常磐道車中）、キジ、キジバト、カッコウ、ツツドリ、ホトトギス、アマツバメ、アカショウビン、アオゲラ、アカゲラ、コゲラ、ツバメ、イワツバメ、キセキレイ、ハクセキレイ、サンショウクイ、ヒヨドリ、モズ、ミソサザイ、クロツグミ、アカハラ、ヤブサメ、ウグイス、コヨシキリ、オオヨシキリ、キビタキ、オオルリ、エナガ、コ

ガラ、ヒガラ、シジュウカラ、メジロ、ホオジロ、アオジ、カワラヒワ、スズメ、コムクドリ、ムクドリ、カケス、ハシボソガラス（計49種）

<参加者>

村井治・登代、服部隆雄、小島経一、三神鶴吉・淑子、染谷迪夫、西巻実、赤尾完・弥生、中 弘・迪子、一番ガ瀬国彦、松田幸保、浜田田鶴、牧野陽子、鈴木かね子、秋谷稔、須田和雄、木村稔、飯泉仁・久美子（計22名）

○ 手賀沼カウント

調査日時 1994年6月12日
晴れ 9:00~12:00

<カウント班> 畑 幸正、木村 稔
以上2名

<探鳥班> 大野貞澄、川端英雄、首藤美恵子、中尾米子・正直、松本庸夫、服部隆雄、藤波よう子、小池好子、本間知真里、伊藤夕香里、鈴木かね子、木原葉子、関谷元吉、村井 治・登代、小池忠、室澤はるみ、大島英子、須川豊伸、折原淳二、赤尾 完、梅村康之、染谷迪夫、大川昭二、大久保陸夫、小玉文夫、秋谷 稔、高橋敏彦、杉山義弘、須田和雄、西巻 実、坂巻忠雄、西城 猛
以上34名 合計36名

鳥 種	上 沼	下 沼	計
カイツブリ	5	4	9
カワウ	7	31	38
ゴイサギ	0	1	1
アマサギ	0	2	2
ダイサギ	0	4	4

チュウサギ	0	2	2
コサギ	0	2	2
アオサギ	1	0	1
カルガモ	10	26	36
オオバン	7	4	11
コチドリ	1	1	2
ヨシゴイ	0	2	2
計12種	31	79	110

＜他に認めた鳥＞サシバ、キジ、キジバト、カワセミ、コゲラ、ヒバリ、ツバメ、ハクセキレイ、セグロセキレイ、ヒヨドリ、モズ、ウグイス、オオヨシキリ、セツカ、シジュウカラ、メジロ、ホオジロ、カワラヒワ、スズメ、ムクドリ、オナガ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、計23種、合計35種

○ 第3回親睦情報交換会

(6月18日) 梅村 康之

昨年10月23日に第2回情報交換会が、開催されて以来久々の会となった。今回は和室でなくテーブルを囲んでの会合となった。参加者めいめいがお好みのお酒や、料理、つまみを持参して集った。安本氏からはワシタカの渡りの調査結果のプリントが配られ、学術的な説明をしていただいた。

西巻氏(だった様な記憶)が皆んなの前に、1本の羽根を出し「何の羽根かわかりますか」約20cm程で灰色に黒の横縞が有った。ワシ・タカ類の羽根ではないか、という意見が多かったが、首藤美恵子氏と染谷氏より「フクロウ」の羽根だと指摘が有り、フクロウと他の鳥の羽根の構造の違いについて説明が有り、フクロウはこの羽根の構造により羽音無しで飛ぶ事が出来ると、解説が有り、その他色々楽しい話しが盛りだくさんの一夜となった。次回が早く来る事を。

○ 手賀沼カウント

調査日時 1994年7月10日
曇り 9:30 ~ 11:30

＜カウント班＞ 染谷勉夫、坂巻忠雄、赤尾 完 以上3名

＜探鳥班＞ 山口達雄、長岡明彦、木原葉子、立川節子、野口幸子、宮下三禮、高橋敏夫、安本昌彦、瀬下猛男、川村新、関谷元吉・圭美、島崎純造、梅村康之、村井 治・登代、小玉文夫・信子、久保いみ子、浜田田鶴、杉山義弘、高橋敏彦、西巻 実、西城 猛、以上24名 合計27名

鳥 種	上 沼	下 沼	計
カイツブリ	5	3	8
カワウ	18	21	39
ヨシゴイ	7	0	7
ゴイサギ	1	1	2
アマサギ	1	1	2
ダイサギ	0	14	14
チュウサギ	0	2	2
コサギ	9	4	13
アオサギ	7	2	9
カルガモ	32	68	100
バン	6	2	8
オオバン	11	10	21
コチドリ	2	0	2
計13種	99	128	227

＜他に認めた鳥＞ サシバ、コジュケイ、キジバト、カワセミ、コゲラ、ヒバリ、ツバメ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、オオヨシキリ、セツカ、シジュウカラ、メジロ、ホオジロ、カワラヒワ、スズメ、ムクドリ、ハシボソガラ

ス、ハシブトガラス、計19種、合計32種

○ 手賀沼探鳥会にて

(7月10日) 山口 達雄

沼の空激しく返す夏燕

葭切の嘴の合間に沼の面

蛇籠密に鶺鴒の親子の睦みをり

両翼を干して川鶺鴒の晴れ間かな

葭五位や蛇の目の翼の低う飛び

◆ ご 寄 附

瀬下 猛男様 柴田祐一様 笠原最季雄様
より多額のご寄附をいただきました。

皆様のご芳志、厚くお礼申し上げます。

◆ 訂 正

No.118 P4 手賀沼カウントの表で
ハシビロガモ 上沼30 下沼1→28へ
計 1→58へ

ここに訂正させていただき、つつしんで
お詫び申し上げます。

サイハテ探鳥会

No.1

平成6年5月27-31日

流山市 田丸 喜昭

日本に住んでいると、一般的には日本の周囲に国境があるという観念が薄い。宗谷岬から樺太の陸地を望んでみてもやはり国境にいるという感じがしなかった。宿の入り口に“歓迎 サイハテの旅ご一行様”の看板が出ているのを見て、日本のサイハテに来たのだなと思った。

出発の5月27日は、かなりの雨が全国的に降り、羽田での待ち時間の間にも、八丈島行きの飛行機がキャンセルされたりしていたが、稚内空港に着くと、我々の乗った飛行機が止まったすぐそばに、チップケなセスナ機がとめられていて、これが接続する利尻空港行きの飛行機であった。到着ロビーに入って係員に聞いてみると、天候調査中で、多分だめだろうとのことなので、すぐに予約を取り消して、島までのフェリーボートに乗り換えた。飛行機は東京-稚内と稚内-利尻間はそれぞれ一日一便しか運行されていない。

クイーン宗谷号が稚内の岸壁を離れるとき、防波堤の上に、ウミネコやオオセグロカモメの群れの中に一羽のシロカモメがいた。船上から海上にジット目をこらしていると、数羽の群れの小型の水鳥が船より早く飛んでいるのが見える。稚内と利尻島の陸に近いところでは、この鳥達が何百羽の群れを作っていて、時々一斉に飛び上がるのが見えた。ウミスズメの種類であろう。数は少ないが、時々ウミガラスと思われる鳥も見られた。

利尻島のオシドリ港の目と鼻の先にある日本野鳥の会の協定旅館、利尻富士観光ホテルに、午後2時頃荷をといたが雨足と風は相変わらず強く、探鳥向きの天気ではないが、宿でゴロゴロしているのもつまらないので、傘をさして双眼鏡だけを持って近所をまわることにした。港の防波堤や空にはウミネコやオオセグロカモメが多数いて、その中に何羽かのウミウが見えた。漁港で魚を掲げている小船があり、その側にカモメ達が落ちた魚を狙って右往左往していた。漁師のオジサンに何の魚かと聞いてみたら15cm程のオオナゴゴだそうで、どうやって食べるのと聞いたら、刺身が旨いとのこと。軽く酔いでしめて一杯やりながら食べたなら旨かろうと思ったが、利尻滞在中に残念ながら我々の口に入ることは無かった。

港の側にベシ岬灯台が、そそり立つ大きな高い岩場の上に立っていて、それに向かって尾根づたいに草場の道を上りかけると、近くでキョロキリ キョロキリ キーキョロキーチリリ(フィールドガイドに載っている声を使う)と澄んだ高い声が出た。ノゴマが雨の中の我々の利尻到着を歓迎するお出迎え

である。50メートル以上もそそり立つ岩場にはオオセグロカモメとウミネコが抱卵中である。利尻島は利尻富士(1721メートル)をヘソにして周囲53キロ程の島だが、利尻富士はまだ雪に覆われていた。

町役場の裏の畑と藪を抜けると林道に出た。雨にもかかわらず、このポイントから急に忙しくなった。林道を緩やかに上って行くにつれ周囲の近くの藪から鳥の鳴き声が沢山するし、目の前を鳥がサッと横切ったりする。ヒガラ、コマドリ、エゾセンニュウ、ウグイス、マキノセンニュウ、センダイムシクイ、ツツドリ、カッコウ、アオジ、カワラヒワ、ハシブトガラス達である。この島ではハシブトガラスをほとんど見掛けない。あちこちキョロキョロしているうちに、中には何鳥かわからないのも沢山いるのだが、忙しさにまぎれて、一々チェックができない。特にムシクイ類がそうである。エゾセンニュウやウグイスなどは、すぐ頭の上の木にいたるのだが姿を確認することができない。数の上ではヒガラが多いし、関東地方では聞くことのできないアオジのチョッピーチョー チクイチリリというさえずりも頻りに聞こえ、関東地方の冬の間、藪の中でツツツと地鳴きしている鳥とはまったく別の鳥のようで、木の枝の上で顔を上に向け、くちばしを大きく開けて元気にさえずる姿が良く見られる。この林道は約2キロ程行ったところで行き止まりになり、そこから折り返してゆっくりと帰路につく。林道の入り口は郵便局の前の道で、役場を通り抜けたのは間違いだった。宿の支配人に後で聞いたらこの島のコマドリはリシリゴマと呼ばれ、昔はカスミアミで取って珍鳥として売られたそうである。彼の表現を借りれば、この島では車を運転して道を走ると、良く鳥達が車を先導してくれるそうだ。それくらい鳥が沢山いるのだろう。

この島の名物はウニなので、夜食はウニづくしとなった。まだ生きているウニを初めて食べたが、黒い内臓の中にあのオレンジ色のウニが入っている。ウニは昆布を食べて生きているので、内臓を食べても良いとのことだが。皿の上でウニの棘はまだゆっくりと動いている。宿のロビーにイタズラ帳がおいてあり、支配人が何か書いていって下さいというので、ペラペラまくってみると、結構この島へバードウォッチャーがやってきている。数年前の日付けで、“我孫子市 木村”のサインつきで鳥の記録があった。我孫子野鳥を守る会会長の木村氏だろう。最後の日に私も記録を書き込んできた。28日、目を覚ますと快晴の空に太陽がもう昇っていて、時間はまだ4時だ。北緯45度ともなればこの時期日照時間がかなり長いのだろう。早速早朝探鳥会にセーターを着込んでテープレコーダーをポケットに入れて宿を出ると、風が物凄い。利尻富士の頭の方には雲が巻き上がり帽子をかぶっているように見える。昨日行った林道に入ると、藪や林がやや風を防いでくれるが、鳥の声と一緒にマイクに風の音が強く入ってしまった。頭の上をアマツバメが通過していく。

この島では大手のレンタカー会社は営業していないで、我々が借りたレンタカーは、島の宿の一軒が営業しているもので、観光ホテルの支配人が軽自動車を勧めたが、私は普通自動車のオートマチックを選んだらコルサであった。この島のレンタカーの料金は普通の倍ぐらいする。ガソリン代も高いそうだ。この車はパワー・ステアリングでないので、最初に交差点で右折れしようとしたら、自分では普通にハンドルを切ったつもりだったが、車が回りきらずに驚いてしまった。これから先、気をつけてハンドルを一杯切らねば。まずは利尻北麓野営場(キャンプ場)まで登り車を駐車場に置き、原生林の中を鳥のコーラスを聞きながらボン山を目指して登る。500メートル程行ったところに日本100銘水の一つの甘露泉がある。林の中だからこの日の強風からは守られていた。ここでの主役はコルリ、センダイムシクイ、ウグイス、ヒガラ達だった。銘水も一杯飲んだ。

山を下って富士岬にでるが、草原の岩場で強風から身を守るものがない吹きさらしで、真っ直ぐ歩けないし、カメラと三脚も吹き飛ばされそうである。岬の岩場にはカモメが多数抱卵していて、この強風

の中をカモメだけは元気に空を回っている。礼文水道の向こう側に礼文島が横たわっているのが望める。島の西海岸の中央部にあるのが杓形の町と港で、ここから小樽向けのフェリーが発着している。この町から利尻富士に向かって舗装された道路が高度450メートルの見返台展望台まで登っている。裾野の藪や林にも鳥が多いが、なにせこの強風である。展望台にはまだ雪があった。

とにかく車の数も少なく、信号機が島全体で4か所しかないのも、横風をのぞけばスイスイと走れるがこちらは何も急ぐ旅でもないで観光客気分でのんびりと島の南端にある仙法志御崎に入った。昼時なので昼食が食べられるところを探したが、見栄えのしない蕎麦屋が一軒だけなので、通り過ぎてしまった。宿でオニギリでも作ってもらえば良かったと思った。快晴の空に浮かぶ沢山のオオセグロカモメがきれいである。ここから道路は島の東側に入り北に向かうが、5キロ程進んだ所の道路に沿って周囲1キロ程のオタマリ沼がある。

車を止めて、沼の縁に立つと足元からトリが急に飛び立ち、目の前を旋回し始め、しばらくするとすぐ近くの草が生えている所に下りたが、何となく落ち着かない様子だ。双眼鏡で飛ぶところを追っていたら顔に模様があるのでキョウジョシギかと思ったが、下におりたところを見たらアカエリヒレアシシギだ。多分巣が近くにあるのかも知れないが、我々がいる場所に沼の看板があり、これと利尻富士をバックに観光客が写真を撮るところだから、巣だとすればあまり良い場所ではない。アオジとノゴマが歓迎のさえずりをし、利尻富士がその勇姿を見せている。沼の中にオカヨシガモの雄の一羽が夏に向かうエクリプス(?)で水に浮かんでいた。ショウドウツバメとイワツバメが水面をかすめて行く。沼を一周して看板のところにもどってアカエリヒレアシシギの写真を撮ろうと思ったが、もう姿を現さなかった。

地図によると海岸沿いの道路を進み、鬼脇の町から利尻富士に登る道があり高度400メートルの場所に駐車場のマークがあったので、そこへ向かおうとしたが、道を間違えて藪の細道へ車を乗り入れてしまったようだが、鳥達は藪のなかで元気にさえずっている。あまりの悪路なので高度200メートル程まで行って方向転換し麓へ戻ってきた。帽子のような雲を頭にのせた利尻富士を左に見ながら(もっとも島を巡る全行程で山を左側に見ていたのだが)島の東側を走る道を山から吹き下ろす風を受けながら15キロ走ったところに姫沼への入り口がある。2キロ程登り高度150メートルぐらいの姫沼は大きな木の原生林にかこまれ、風さえなければ鳥の多い場所に違いないが、この日はさしたる収穫は無し。歩くのであれば、姫沼からボン山・姫沼ハイキングコースを通り甘露泉へ原生林を抜けて約2キロを歩くか、その逆のコースで様々な鳥が見られると書いてあるが、我々は沼を一周歩いてだけ海岸道路に戻る。ここから3キロで出発点のオンドマリに帰った。この日、95キロ走り、ガソリン代を含むレンタカー代金は2万円強であった。料金は3時間が基本で1万円。1時間超過するごとに3千円である。本数は少ないが島を一周するバスがあり、料金は2千円程だと思う。

レンタカーを返し、ベシ岬へカモメの抱卵の写真を撮りに登ったが、尾根の部分の風の強さは台風並で風に吹き飛ばされ崖から下へ落ちそうなので、2~3枚撮ってあきらめてしまい、宿に戻った。この日は稚内からのフェリーの何便かが欠航したとのこと。

29日早朝、部屋の窓の外を見ると、快晴で風があまり無さそうに見えるので、さっそく出掛けることにしたが、玄関を出ると相変わらずの強風である。姫沼方向へ左側が海岸で右側が藪に覆われた山の斜面になっている道路を歩こうと思ったが、あまり風にあおられるので町の外に出たところですぐに諦めてしまった。ここではツメナガセキレイ、ノジコ、カワラヒワ、ハシブトガラス、カモメなどを見る。例の林道に入れば、多少風も少ないだろうと思って行ってみたが、その希望もかなわず、早々に引き返し、本町の浜に出てみると、ここは割りと風が少ない。頭上5メートル程のところをハヤブサ

がゆっくりと通り過ぎる。水面の上に、一人取り残されたカシノリガモの雄が一羽ゆっくりと右手の方へ泳ぎ去った。

9時50分発の稚内行きフェリーは風で揺れるかと思ったがさほどでもなく、船上からマダラウミスズメが数羽飛ぶのを見たが、連日の早朝探鳥会にくたびれたか、間もなくグッスリと眠ってしまい稚内に到着するまで何も見ず。今度のレンタカーはホンダ・アコードである。国道40・238号線で、まずは空港の手前にある大沼に立ち寄る。ここは白鳥や他の渡り鳥が渡りの途中で羽根を休めるところで知られ、白鳥は一日に5,000羽程見られるそうだ。この時期はトビがやたらと多い。堤防の上を走ると、ヒバリとキマユツメナガセキレイが走る車の前を頻りに横切る。やはり強風で車の外には出ず。

宗谷湾を左手に見て走る国道と海岸線の渚の間には数メートル程の藪があって、運転中には波打ち際に鳥がいたとしても見ることはできない。漁港の手前にオナガガモの20~30羽程の群れが海岸近くに浮かんでいた。宗谷岬の手前を右に入り坂を登って行くと、宗谷丘陵肉牛牧場が波打つような丘陵群に展開している。広さが東京都の千代田区、中央区と文京区を合わせたぐらいの面積で、現在3千頭の肉牛が肥育されているが、将来は面積を広げて一万頭まで増やす計画とのこと。この牧場は牧草により牛の低コスト肥育を目指しているらしい。ここで見る風景はニュージーランドの牧草丘陵地と極めてよく似ている。牧場を下ったところが宗谷岬で大きな駐車場があり、宗谷海峡を越えた向こう側に樺太が霞んで見える日本の北のサイハテ国境の岬である。波打ち際を数羽のシギが飛び、翼に白帯があるのでイソシギかと思えば追うと、間もなく水際の藻があるところに下りた。6羽のアカエリヒレアシギで、我々のいるところからわずか5メートル程の場所なので一生懸命に写真を撮る。その時はエリの赤色の強いほうが雄だろうと思ったが、後で写真と図鑑を比べてみると、薄い赤色のほうが雄であることを知った。

日本もこの辺まで来れば、交通量も少なくまさにニュージーランドの国道1号線のようなものだ。のんびりと走れば、お急ぎの方は簡単に追い越して行くし、我々が住む街の交通事情とは段違いだ。国道をオホーツク海に沿って東南に向けて20キロ程走ったところに村宮猿払牧場があり、初めはそこに寄るつもりだったが、農場入り口がドライブインのような建物に見えたので勘違いして通り過ぎてしまった。オホーツク海についてあまり注意しなかったが、後で地図を見てみると太平洋との境には千島列島が横たわっていた。浜猿払を左へ曲り、ポロ沼へ立ち寄ろうとしたが、どうやら沼辺までは車で接近する道がなさそうで、舗装された村道を走り続けていくと、鳥の声が色々聞こえる林の中を通りかかったので林道のようなところへ車を乗り入れて、外に出ると、まさに鳥のコーラスのドマンナカであり、写真よりもテープレコーダーの出番だ。ウグイス、エゾセンニュウ、マキノセンニュウ、エゾムシクイ、センダイムシクイ、アオジ、カワラヒワ、ETCがそれぞれ力一杯その声を競っている。中には何の声かわからないものもある。ただし、ことはそう簡単ではない。なぜこれだけ鳥が多いかというと、単純に言えば餌が多いということだが、その餌であるべき蚊を中心とした虫達が、あまり見掛けない人間の到来に喜んで、あっという間に我々の皮膚にワッと集まるのだ。多分今までは風が強くてそのことに気がつかなかったのだろうが、最近のような文化生活をエンジョイしている我々は、こういうことが起こることすら考えもしなかった。虫除けの薬を持っていないので、たっただけのことは馬や牛がシッポで虫を追うように、空いた手を常に振り回していなければならず、それも我慢できなくなり、そんな良いポイントを退散しなければならなくなった。

同じ道をもどり、国道に近い沼地を抜けるところで、電線にカッコウが止まって鳴いていた。車を道の脇に寄せて止め外に出ると、頭のすぐ上の電柱にオオジシギが優雅に止まっていた。飛ばさないよ

うにそろそろとカメラを取りだし写真を撮っていると、50メートル程先の低い木の上にベニマシコが飛んで来て止まったので、これも3枚程の写真を撮り、鳴き声の録音もした。国道に沿って所々に沼地があり、水面にキンクロハジロやコガモの群れを見た。

ここから10キロあまり国道を東南に走ると今日の宿泊地である浜頓別のクッチャロ湖畔の国民宿舎北オホーツク荘がある。ここも日本野鳥の会協定旅館である。日は長いので、部屋に荷物をおいて宿の裏手になる湖畔の自然遊歩道へ行って見た。鳥の声が一杯だが、ここの蚊も物凄い。顔や手の甲に止まるとたちまち血を吸い始めるので、それらを振り切るためには早足で歩かなければならない。藪の道から湖畔の広い場所に出ると、蚊の攻撃も少なくなりやや落ち着いた気分になる。残光の少なくなった湖面を見ると十数羽のヒドリガモが浮かんでいた。森の方からオオワシの幼鳥が夕暮れの空を湖面を横切って行った。森から離れた湖の岸に沿った遊歩道には、いることはいるが蚊は少なく、近くの藪やそのむこうの森からの鳥のコーラスを楽しむ事ができる。この湖岸の遊歩道も500メートル程行くと道は左へ折れ、何とまた森の中へと我々を導いているのではないか。センダイムシクイ、ウグイス、エゾセンニュウ、コマドリ、カッコウ、ツツドリなどの声に囲まれながら急ぎ足で宿に戻った。宿で除虫剤か塗布薬が買えるかと思ったが、ここの人達は虫になれているのか、刺されることがないのかありませんとのこと。

つづく

- “ 鳥 だ よ り ”
- | | | |
|----------------------------|-------------------------|-------------------|
| | 7. 04~7. 21 | |
| | | (高野山) フクロウ (幼鳥の声) |
| 6. 05 [湖北台東小斜面] フクロウ (鳴き声) | | 高橋敏夫 |
| | 7. 06 [土谷津] ホトトギス (声) | |
| 6. 11 [湖北台東小斜面] フクロウ (鳴き声) | 7. 09 [久寺家] ホトトギス (声) | |
| | | 以上 西巻 実 |
| 6. 16 [土谷津] コゲラ (1) ドラミング | 7. 09 [天王台] ホトトギス (声) | |
| 6. 17 [土谷津] コゲラ (1) ドラミング | | 首藤佑吉 |
| | | 以上 西巻 実 |
| 6. 18 [白山] ホトトギス (声) 坂巻忠雄 | 7. 09~7. 12 | |
| | | (高野山) ホトトギス (声) |
| 6. 23 [高野山] ホトトギス (声) | | 高橋敏夫 |
| | | 笹川昭雄 |
| 6. 25 [天王台] ホトトギス (声) | 7. 14 [上沼] クロハラアジサシ (2) | |
| | | 鳥研平岡氏通報による |
| | 7. 18 [布施新町] ウグイス (声) | |
| | | 以上 西巻 実 |
| 7. 04 [高野山] ホトトギス (声) | | 高橋敏夫 |
| | 7. 24 [高野山] ウグイス (声) | 高橋敏夫 |

我孫子野鳥を守る会会報 第120号

発行人	木村 稔	TEL(0471)82-7958
住 所	我孫子市寿1-21-35	
振 替	00140-2-51628	我孫子市久寺家2-5-20 西巻方
	我孫子野鳥を守る会	
会 費	年額2,000円(高校・大学生1,000円、中学生以下500円)	